

感性を高め合う音楽の授業づくり

— 言葉で伝え合う活動を通して、音楽全体のよさや美しさを味わう鑑賞の授業 —

白石 篤¹

鑑賞領域の学習において、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと」について更なる充実が求められている。本研究では言葉で伝え合う活動を実践し、音楽全体を味わう授業を構想した。結果、生徒は自分にはない新たな感じ方を知り、自分にとっての音楽の価値意識を再確認でき、音楽の味わいを一層深められた。感性を高め合う一つの手立てとしての有効性を検証した。

はじめに

中学校学習指導要領に示される音楽の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」である。

中学校学習指導要領解説音楽編(以下、「解説音楽編」という)では「音楽に対する感性」について「音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るとき心の働き」(文部科学省 2008 p. 7)と定義されている。「感性」について、中央教育審議会教育課程部会芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ(以下、「芸術WGの取りまとめ」という)には、「特に重要な『感性』の働きは、感じるという受動的な面だけではない。感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくことなども含めて『感性』の働きである」(中央教育審議会 2016 p. 3)と示されている。「感性」の育成に関する記載が小学校、中学校、高等学校学習指導要領にあることから、「感性」は豊かな情操を養うために音楽教育全般にわたって育成すべき能力である。なお、本研究では「感性の育成」を「感性の高まり」と捉えた。

本多・山本は「感性はもともと、個々の内的なものである。それを表現し、共有することによって、さらに感性は磨かれる」(本多・山本 2015)と述べている。本研究では、「共有すること」を言葉で伝え合う活動を通して行うことで、生徒は自分にはない新たな感じ方を知り、自分にとっての音楽の価値意識を再確認することが感性の高まりにつながると考えた。

研究の目的

本研究は、音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことを言葉で伝え合う活動を通して、それまでの自分に

はない新たな感じ方を知り、自分にとっての音楽の価値意識を再確認することで音楽の味わいを一層深め、音楽に対する感性を高め合える授業展開を提案することを目的とした。

研究の内容

1 研究の背景

「芸術WGの取りまとめ」には「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値を考えたりしていくこと、(中略)更なる充実が求められる」(中央教育審議会 2016 p. 1)や、「客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考えを持ったり音楽に対する価値意識を構築したりしていく過程に学習としての意味がある」(中央教育審議会 2016 p. 22)と示されている。つまり、感性を高めるために言葉で伝え合う活動を通して他者と交流し、よさや価値を考えていく学習が求められていると捉えられる。

「解説音楽編」の第2学年及び第3学年の2内容(2)B鑑賞(1)アには「音楽を形づくっている要素(以下、「要素」という)や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと」(文部科学省 2008 p. 51)とされている。「根拠をもって批評」とは「要素や構造などの客観的な理由をあげながら、言葉で表すことである」(文部科学省 2008 p. 51)と示されている。また、「音楽のよさや美しさ」について「その音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為」(文部科学省 2008 p. 52)と示されている。これらのことから、言葉で伝え合うために客観的な根拠を挙げながら、音楽のよさや美しさを生徒が説明できるようにすることが必要であると考えられる。

千葉・毛利・松田・小平は「グループ活動は、学びを共有するための活動の手だてとしては有効であったが、(中略)子ども同士が高め合うための教師の発問や活動の手だてについては、今後も検討が必要である」(千葉,他 2010)と述べている。

1 秦野市立本町中学校
研究分野(授業改善推進研究 音楽)

加えて、田中は「指導内容を明確にすること、つまり、音楽の何を知覚・感受するのかを焦点化することで、主体的に音楽を聴くことができた」（田中 2009）と述べているように、音楽を焦点化して鑑賞することは学習段階では必要である。しかし、臼井(2014)は「音楽全体」の「一部分」であるという意識を持つことが大切であるとしている。以上により、生徒の将来の音楽鑑賞の姿を想像した時、音楽全体のよさや美しさを味わう視点での学習も必要であると考えた。

そこで、本研究においては、音楽を聴いて感じたことや気付いたことを他の生徒と共有することによって、様々な感じ方があることに気付かせるだけでなく、自分にとっての音楽の価値意識を再確認する活動が重要であると考えた。そして、「要素」をお互いの感じ方や気付きを理解するためのツールとして位置付け、「要素」を絞り込まず、音楽全体を味わう学習を行うこととした。

2 研究の仮説

以上のことから、生徒が音楽に対する感性を高めるために、次の仮説を立てた。

教師が特定の「要素」に絞り込んで鑑賞の指導をするのではなく、生徒自らの感性を働かせて音楽全体から「要素」を聴き取り、それを根拠に音楽のよさや美しさを言葉で伝え合う活動を行うことによって、他者の感性に触れ、自分の価値意識を再確認することができるであろう。これが感性の高まりにつながるのではないかと。

3 研究の手立て

(1) 言葉で伝え合う活動

「芸術WGの取りまとめ」では「鑑賞領域の学習では、自分が見いだした音楽の面白さ、よさや美しさなどについて、言葉で説明したり、批評したりしながら、他者と互いの考えを交流したり、自分の考えを明確にしたりできるようにする」(中央教育審議会 2016 p. 11)と示されている。

本研究では、クラス内で組織された班で、「言葉で伝え合う活動」を効果的に行うために次の三つの工夫を行った。

ア 活動ルールの提示

生徒が平等な立場で話し合いができるようにするために活動ルールを提示した(第1図)。

班活動のルール

(1) 自分の意見は自信を持って言おう。

(2) 人の話を最後までしっかりと聞こう。

(3) 人の話を聞いて反応しよう。

例「一緒だったら同じです」「(新しい発見だったら)なるほど～」など

※音楽の感じ方は自由です。

否定したりせずに、受け入れましょう。

第1図 班活動のルール

この活動ルールにより、生徒達が音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことを発言しやすい雰囲気を作ることができると考えた。

イ 感じたことや気付いたことの例示

感じたことや気付いたことを「要素」と関わらせ、その文言を例示した。具体的な例を示すことによって、生徒がその例を応用して新たな感じ方に気付くことができると考えた。

ウ 班活動での付箋の使用

班活動において、生徒が言葉で伝え合う活動を活発に行えるように、付箋を使用した。音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことを伝え合う時に、生徒の意見が視覚化できるようにした。

(2) 音楽全体を味わう学習

「解説音楽編」には「要素は、生徒が生涯のうちに会う多様な音楽を理解するための重要な窓口となる」(文部科学省 2008 p. 8)と示されている。

言葉の捉え方は人によって様々であるが、そこで感じたことを「要素」と関わらせて伝え合うことによって、明確に相手に伝わり、他の生徒の言葉から自分にはない新たな感じ方を知ることができると考えた。

なお、本研究では、既に「要素」の学習を終えていることを前提とする。

(3) 選曲

言葉で伝え合う活動を通して音楽のよさや美しさを一層味わうためには、音楽の構造を捉えやすい曲を選ぶ必要がある。本研究では、2種類の旋律が楽器を変えて繰り返され、速度が一定であり、強弱が「とても弱く」から始まり次第に大きくなっていることなど、構造の捉えやすさから「ボレロ」を選曲した。検証授業においては、第1時と第3時に鑑賞した。

また、旋律や形式、強弱などの音楽の構造が捉えやすく、演奏時間が短く他の学習活動にも時間を配分できることなどから、既習曲であるヴィヴァルディ作曲の「春」より第一楽章と、ムソルグスキー作曲の組曲「展覧会の絵」より「鶏の足の上の小屋」の2曲を選曲した。検証授業において、第2時に鑑賞した。

4 検証の方法

本研究では、生徒の記述の変容から感性の高まりを検証する。検証の場面と項目は以下の通りである。

(1) 検証の場面

一つは第1時冒頭と第3時冒頭における生徒の変容、もう一つは第3時における冒頭と班活動後における生徒の変容を検証する。

(2) 検証項目

一つは、鑑賞して感じたことや気付いたことの各「要素」に関する記述数の変化、もう一つは感じたことの記述の深まりの変化である。

深まりとは、本研究では鑑賞して感じたことが、「要

素」や要素同士と関わらせて記述できたかどうかで読み取る。

5 検証授業

(1) 検証授業の概要

【実施期間】平成28年10月17日(月)～11月1日(火)

【対象】秦野市立本町中学校第3学年(230名)、なお3時間とも授業に参加した生徒は196名

【題材名】音楽に対する感性を高め合おう
「ボレロ」ラヴェル作曲

【指導時間】3時間扱い

【題材の目標】「ボレロ」の音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、要素や構造と曲想との関わりを理解して聴き、主体的に解釈したり価値を考えたりするなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

【評価規準】第1表に示す。

第1表 評価規準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
「要素」や構造と曲想との関わりなどに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	「ボレロ」の「要素」を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりするなどして音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

(2) 検証授業の構想

検証の構想を第2表に示す。

第2表 検証授業の構想

第1時	・感じたことを「要素」と関わらせながら説明する方法を学ぶ ・「要素」の復習を行う ・班活動の手順やルールを知る
第2時	・感じたことを「要素」と関わらせながら、伝え合う力を身に付ける
第3時	・感じたことを共有し、新しい感じ方を知り、自分にとっての価値意識を再確認する ・これまでの学習を踏まえて再度鑑賞する

第1時、生徒は、まず、「ボレロ」を鑑賞して感じたことを、「要素」と関わらせながら説明する方法を学ぶ。次に、「要素」の復習を行う。最後に、班活動の手順やルールを知る。

第2時は、1、2年時に学習したヴィヴァルディの「春」より第一楽章と、ムソルグスキー作曲の組曲「展覧会の絵」より「鶏の足の上の小屋」を鑑賞して、生徒が感じたことを多くの「要素」と関わらせながら伝え合う。

第3時は、1、2時間目のまとめとして、まず、冒頭で「ボレロ」を鑑賞する。次に、班活動を行い、「ボレロ」を鑑賞して感じたことや気付いたことを共有する。そして、「ボレロ」を全曲鑑賞し、感じたことや気付いたことをまとめる。

(3) 検証授業の展開

ア 第1時

学習目標を「感じたことや気付いたことを『要素』と関わらせながら伝え合う」と設定した。

第1時の指導計画を第3表に示す。

第3表 第1時指導計画

学習内容
1 「ボレロ」を鑑賞し、感じたことや気付いたことをワークシートに記入する
2 ワークシートに記入したことを付箋に一文ずつ記入する
3 班活動のルールを聞く
4 班単位での話し合いを行い、感じたことや気付いたことを発表しながら、付箋を用紙に貼る
5 付箋をグループ分けする
6 「要素」の確認をする
7 付箋のグループと、「要素」の関連を確認する
8 班活動で挙げられなかった「要素」の説明を聞く
9 本時の振り返りを行う

なお、「ボレロ」は、約15分の全曲のうち後半の約5分を鑑賞させた。また効率的な班活動が行えるように、班活動の手順を丁寧に説明した。感じたことを「要素」と関わらせて説明させるために「要素」の復習をさせた。

イ 第2時

学習目標を「『要素』や構造と曲想との関わりなどに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組む」と設定した。

第2時の指導計画を第4表に示す。

第4表 第2時指導計画

学習内容
1 「春」より第一楽章を鑑賞し、感じたことや気付いたことを、前時で学習した「要素」と関連づけてワークシートに記入する
2 「春」の鑑賞で挙げられなかった「要素」を確認し、挙げられなかった「要素」の説明を聞く
3 「鶏の足の上の小屋」を鑑賞し、感じたことや気付いたことをワークシートに記入する
4 班単位の話し合いを行い、「鶏の足の上の小屋」を鑑賞して感じたことや気付いたことを、「要素」と関わらせて共有する
5 注目して聴いているところなどを共有する
6 班活動を行って参考になったことをワークシートにまとめる
7 班活動で挙げられなかった「要素」を確認し、挙げられなかった「要素」の説明を聞く
8 本時の振り返りを行う

ヴィヴァルディ作曲の「春」より第一楽章の鑑賞では、音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことと、「要素」との結び付きを考えながら鑑賞させた。

ムソルグスキー作曲の組曲「展覧会の絵」より「鶏の足の上の小屋」の鑑賞では、感じたことを「要素」と関わらせて記入させ、関わらせた「要素」を個人で確認させた。

ウ 第3時

学習目標を、「『ボレロ』の『要素』を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりするなどして音楽のよさや美しさをより一層味わって聴く」と設定した。

第3時の指導計画を第5表に示す。

第5表 第3時指導計画

学習内容
1 「ボレロ」を鑑賞し、感じたことや気付いたことをワークシートに記入する
2 ワークシートに記入したことを付箋に一文ずつ記入する
3 班単位での話し合いを行い、感じたことや気付いたことを発表しながら、付箋を用紙に貼る
4 話し合いの内容を「要素」ごとにまとめる
5 ポスターセッションを行い、班活動の成果をクラスで共有する
6 班活動やポスターセッションを基にして、参考になったことをワークシートに記入する
7 「ボレロ」を鑑賞し、感じたことや気付いたことをワークシートに記入する
8 本時の振り返りを行う

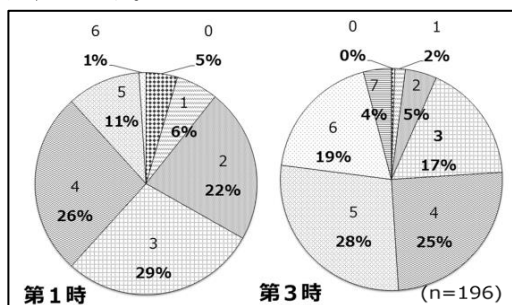
冒頭の「ボレロ」の鑑賞では、第1時と同じように、後半の約5分を鑑賞させた。班活動も第1時と同様の手順で行わせた。その後、約15分間の「ボレロ」全曲を鑑賞させた。

6 検証結果と考察

(1) 第1時と第3時冒頭の変容

ア 各「要素」に関する記述数の変化

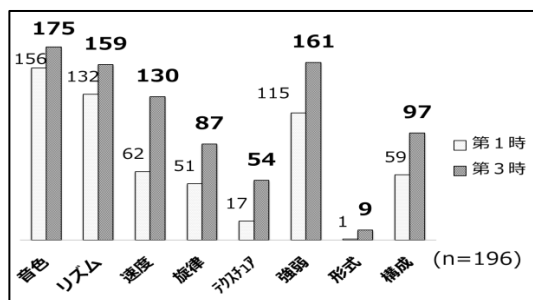
第2図に、第1時と第3時の関わらせた「要素」の数の変化を示す。



第2図 関わらせた「要素」の数の変化

第1時と第3時を比較すると、生徒が関わらせた「要素」の平均は3.03から4.45へと1.42増加した。

第3図に、関わらせた「要素」ごとの変化を示す。



第3図 関わらせた「要素」ごとの変化

全ての「要素」で、増加が見られた。増加の人数は、196人のうち最小で8人(「形式」)、最大で68人(「速度」)である。

生徒のワークシートの記述から第1時と第2時に行った班活動によって、他の生徒から様々な感じ方があることに気付いたことが読み取れた。

イ 記述の変容

第6表に生徒Aの記述を掲載する。

第6表 生徒Aの記述

第1時	淡々とした一定のリズムで演奏されている。音の強弱がすごい。同じのを何回か繰り返している気がした。ヴァイオリンかトランペット系が目立っていた。
第3時	一定のリズムで演奏されていて、とても穏やかで大らかな感じ。楽器1つ1つがそれぞれの音に消されず綺麗な音色で重なり合っていて、それによっていい響き、メロディとなっている。音の強弱などで一気に音楽の雰囲気が変わっており、一定のテンポ、旋律で演奏することで淡々とかつ綺麗に全てが収まっているようにも思える。

第1時と第3時を比較すると、記述量に増加がみられた。また、生徒Aは、第1時は気付いたことのみでの記述であったが、第3時では感じたことを「強弱」などの「要素」と関わらせて記述していた。

生徒Aの第3時の記述と同様に、感じたことの記述について、「要素」と関わらせて記述が出来ている生徒の割合は、第1時は17%であったのに対し、第3時は、56%と増加が見られた。このことから、音楽を一層味わって聴くことができたと考える。

また、第7表に変容が見られなかった生徒の記述を掲載する。

第7表 生徒Bの記述

第1時	ヴァイオリンの音が目立っていて、途中コントラバスの入りがとてもいい味をだしていた。フルートも背中を押しているような感じで、入ってきて、終盤は、シンバルの音もでていて全部の音が1つ1つ目立っていた。
第3時	フルートの入りがよくて、どの音もはっきり聞こえた。ヴァイオリン、ドラム、シンバル、コントラバスなどが主に目立っていて、いい味をそれぞれ出していた。

生徒Bは第1時と第3時とも、「音色」についてのみ記述している。第1時には良い表現も見受けられるが、記述の変化が少ないことから変容は見られなかったと考える。

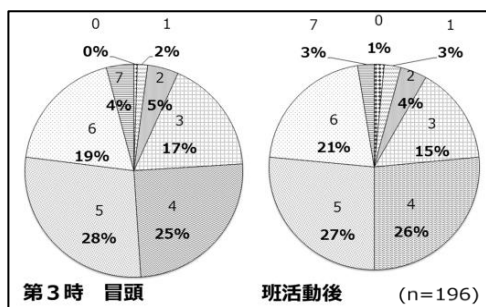
生徒Bは第1時、第2時の班活動において、「考えたことや参考になったことを書こう」の記述欄に「みんな一人ひとりの意見が違って、個性的な意見がいっぱいあった」や「あわただしいという表現がよかった」と記入していた。他者の意見を理解することはできていたが、それを自分の表現に加えることが十分でなかった。他者の意見を踏まえた記入を促す声かけが必要であったと考える。

(2) 第3時冒頭と班活動後の変容

ア 各「要素」に関する記述数の変化

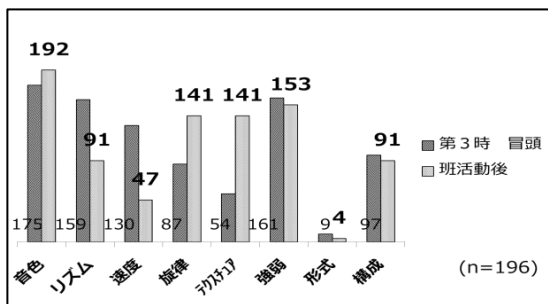
第4図に第3時の冒頭と班活動後の関わらせた「要素」の数の変化を示す。

第3時冒頭と班活動後で、三つから六つの「要素」を関わらせて記入できている生徒は、両方とも89%であり、変容は見られなかった。なお、本時のみでの変容は見られないが、3時間では変容が見られた。



第4図 関わらせた「要素」の数の変化

第5図に、第3時冒頭と班活動後に関わらせた「要素」ごとの変化を示す。



第5図 関わらせた「要素」ごとの変化

「リズム」や「速度」など、曲全体を通して変化のない「要素」は減少し、第1時や第3時冒頭では関わらせた数の少なかった「旋律」や「テクスチャ」などの進行とともに変化のある「要素」は増加した。

生徒は他者の感じ方を取り入れて鑑賞できるようになり、自分にとっての音楽の価値意識を再確認したと考えられる。

イ 記述の変容

第8表に、生徒Cの記述を示す。

第8表 生徒Cの記述

第3時 冒頭	弦楽器の重なり方などから今にもドレスを着て踊りたくなるような感じがした。最初の主題の次にくる暗めの感じの旋律がこの曲の主題を引き立てていると思った。太鼓の同じリズムでたたいていることが兵隊の足音のように聞こえ、何かの行進を見ているような感じがした。全体的に優雅なパーティーみたいな感じがした。昔の貴族っぽい。
班活動後	最初の方は、弦楽器の高音の楽器で吹いていて、そのメロディが消されないように伴奏を合わせて小さくしているので曲のバランスが保たれるのだなと思った。この弱い旋律から私達が今まで聴いていたメロディに持っていくことによって貴族のような力強くも優雅な感じを表現しているのだなと思った。ソロの弦楽器から様々な弦楽器が合わさってくることによって人がどんどん集まっている情景が浮かんだ。低音の弦楽器の短く切るような音色と高音の弦楽器の伸ばす音によって力強くも優雅な感じがした。

生徒Cの記述では、例えば「優雅な」という言葉の使用回数が増加し、「旋律」や「テクスチャ」について班活動後の鑑賞の記述の表現が詳しくなっている。

なお、感じたことと「要素」を関わらせて記入ができていた生徒の割合は、第3時冒頭は56%であったのに対し、班活動後は71%と増加した。

言葉で伝え合う活動を行った結果、生徒は様々な感

じ方があることに気づき、自分にとっての音楽の価値意識を再確認して鑑賞することができていた。これにより、生徒にとって音楽の味わいが一層深まったと考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 三つの手立ての成果

ア 言葉で伝え合う活動

言葉で伝え合う活動を毎時間行った結果、生徒は「Dさんの表現の仕方が参考になった」や「同じことを考えている人がいた」などと周囲の意見を取り入れ、自分にとっての音楽の価値意識を再確認していることが分かった。

ここで三つの工夫点について成果を述べる。

(ア) 活動ルールの提示

活動を行う前にあらかじめ、ルールを設定したことにより、生徒はルールに則って活動を行った。さらに生徒の意見に対する反応の仕方を提示したことによって、生徒は自分の意見が肯定的に受け止められていると感じることができた。

(イ) 感じたことや気付いたことの例示

例示を行ったことにより、生徒は音楽を鑑賞して感じたことを「要素」と関わらせてワークシートに記入できた。さらに班活動後の鑑賞では、生徒は他の生徒の表現を参考にしてワークシートに記入ができていた。

第3時のワークシートの「班活動を行って、感じたことや気付いたことを書こう」の記述欄に「次回は楽器に着目して鑑賞する」と記入した生徒については、班活動後の鑑賞で、ワークシートから「楽器」に着目した記述が見取れた。このように班活動をいかして記述に変容が見られた生徒が51.45%いた。

(ウ) 班活動での付箋の使用

班活動で付箋を使用したことにより、生徒は活発に活動することができた。付箋をグループ分けする活動においても、生徒達は皆で一枚の付箋について考え、よく意見交換している様子が見られた。

以上により、授業を重ねるごとに、感じたことを「要素」と関わらせて記入ができていた生徒の割合が増え、生徒は一層深く音楽を味わうことができていた。言葉で伝え合う活動を行うことで、生徒は音楽の構造を一層客観的に把握することができた。「言葉で伝え合う活動」が有効であったと考えられる。

イ 音楽全体を味わう学習

音楽全体を味わう学習を行ったことによって、生徒は感じたことを様々な「要素」と関わらせて記入ができていた。さらに、「要素」と関わらせた言葉で伝え合う活動を行ったことにより、生徒は人によって音楽の聴き方が違うことが分かり、様々な感じ方があるこ

とに気付くことができた。

ウ 選曲

本研究では、言葉で伝え合う活動に重点をおき、音楽の構造が捉えやすい3曲を選曲した。その結果、生徒は最初に「音色」や「リズム」を捉え、その後、他の「要素」に関連させていく傾向が、ワークシートの記述から読み取れた。このような学習活動には、「音色」や「リズム」の変化、「強弱」が分かりやすく、指導のねらいに合わせた選曲が有効である。

2 今後の課題

(1) 言葉で伝え合う活動

生徒のゴールの姿を見据えて、活動のねらいを発問や声かけによって明確にしていくことが重要である。

本研究では、生徒が活発に活動できるように三つの工夫をしたが、付箋を用いたグループ活動の場面では、グループ内で個人の取組に差が見られた。

活動の人数や時間の設定についても工夫が必要である。本研究では、学級内のグループ6人から7人で組織されている班で行い、進行役は班長が務めた。グループの人数は、他にも2人や4人などが考えられる。評価に応じた組み合わせや一人ひとりに役割を持たせるなど、生徒の状態を把握した上でのグループ活動の設定の工夫も必要であろう。

また、各活動の時間については、生徒が音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことを伝え合うのに5分、付箋を用いたグループ分けや活動の振り返りに15分程度設定した。しかし、生徒の到達状況には差が見られ、活動時間を延長して行う場面もあった。ねらいに応じた人数や時間の設定をすべきである。

(2) 学習場面の設定

生徒の将来の音楽鑑賞の姿を想像したとき、「要素」を絞り込まずに音楽全体として味わう聴き方を身に付けさせたいと考え、研究を行ってきた。検証授業は3年生の最後の鑑賞で行ったが、この時期までに「要素」の学習が終わっていることが前提となる。しかし、生徒の習得状況には差があるため、3年時に複数回行うなどして学習を積み重ね、継続的に指導していくことが重要である。そのためには、3年間を見通した指導計画作成が必要である。

おわりに

音楽に対する感性を高めるためには、様々なアプローチが考えられる。本研究は、音楽を鑑賞して感じたことや気付いたことを、言葉で伝え合う活動に重点をおいた実践から検証した。

「解説音楽編」には「言葉で表現し他者に伝えることが音楽科における批評である。このように自分の考えなどを表現することは、本来、生徒にとって楽しい

ものと言える」(文部科学省 2008 p.18)と示されている。音楽を鑑賞して感じたことを「要素」と関わらせて表現する活動において、生徒はふさわしい言葉を自分なりに考えて記入し、班活動の中で、設定されたルールに則って活発に自分の意見を伝え合っていた。

冒頭に示したように、感性は豊かな情操を養うために音楽教育全般にわたって育成すべき能力である。小学校で育まれてきた能力を中学校でさらに伸ばし、その先につなげていく必要がある。本研究が、感性を高める手立ての一つとして、音楽科教員の役に立つことができれば幸いである。

引用文献

- 中央教育審議会教育課程部会 2016 「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3/069/sonota/1377096.htm (2016年8月取得)
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社
- 千葉葉子・毛利友紀・松田奈々恵・小平容子 2010 「楽しい鑑賞授業を目指して—子どもの学びが深まる発問と活動の手だての工夫—」
<http://www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou23/23-061-076.pdf> (2016年9月取得)
- 田中香苗 2009 「中学校における鑑賞授業の新たな実践—批評文を取り入れて—」
http://ci.nii.ac.jp/els/110009809301.pdf?id=ART0010311542&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1481527668&cp= (2016年9月取得)
- 本多佐保美・山本純ノ介 2015 「芸術教育によるESDの可能性の探究—音・音楽による感性の開発—」
<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00118616> (2016年12月取得)

参考文献

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2011 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 音楽】』教育出版社
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社
- 臼井学 2014 「生徒にとって意味のある音楽の授業の実践に向けて(4)」(『中等教育資料』平成26年10月号) p.67
- 河村茂雄・品田笑子・小野寺正己 2008 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル中学校』図書文化社